

広島各業界人生物誌

(その249)

広島県経営史研究所
郷土史家

田辺良平

せつきやく
隻脚の身でビルメンテナンス業に挑戦

——川妻 卓——

ビルメンテナンス業の生い立ち

今では全く知られてはいないが、地方都市において広島市はビルメンテナンス業の先駆けの地、とも言われるほどの歴史を有していたのである。その由縁を探ると、原爆によつて全市一帯が廃墟となつた広島市の復興に、いち早く目を付けた深江実の存在が大きかつたと言えよう。

深江は、日中戦争さ中の昭和10年代に、青雲の志しを抱いて満州（現・中国東北部）に渡り企業を起こして、主に南滿州鉄道関連の下請けとして相当な業績を上げていたが、終戦となり昭和22年に裸一貫で日本に引き揚げ、郷里の大坂に帰る途中で焼け野原の広島の惨状を目のあたりにし

た。一昨年までは帝国陸軍一方の中

枢地として、東京・横浜・名古屋・京都・大阪・神戸の6大都市に次ぐ7番目の都市に成長していた広島市の、余りに変わり果てた無残な姿を見て、深江の胸中には「かつての膨大な軍用地を産業用地として、あるいは経済の再生拠点として活用されたら、広島の復興は案外早く進むのではないか」との思いが沸々とわき出しだのであつた。

しかし、しょせんバラック建築の家屋では内装を施すような家屋内細工ではなく、むしろ建具の補修や改良、調度品の修繕が主な仕事であつた。このような不本意な仕事を続けていたが、昭和23年に、三菱広島造船所や呉造船所の下請けとして船舶艤装を受注したことで、事業も軌道に乗

たのである。
この頃から広島市内には鉄筋ビルの建築が行われるようになり、その最初が大手町の市内電車通りと国道2号線が交差する地点に建設された農協ビルであつた。大阪装飾はこのビルの内装工事を請け負つたのを切っかけに、その後に建設された第一生命ビル、朝日会館、県庁舎、裁判所ビル、造幣局から有名であつた夏祭りを主催する稻荷山円隆寺の北隣に置き、資本金19万6千円であった。社名を「装飾工業」とし、「室内装飾」の看板を掲げて、家屋の内装工事を主としてそのアフターケアとして昭和29（1954）年に、子会社の「建物美装株式会社」を設立し、大阪裝飾工業が工事を請け負つたビルの清掃を担当させることとしたのである。これが広島市内におけるビル清掃の先駆けと記録されている。

以下、昭和30年代に入つて次々とビルの清掃会社が設立されている。その主な企業は次の通りであつた。建物美装（昭和29年設立、代表・深江実、広島ビルクリーナー（昭

営業所）である。本社は、三川町の

「大阪装飾工業株式会社」と改称し

た。建物美装（昭和29年設立、代表・深江実、広島ビルクリーナー（昭

和30年設立、代表・大下大二)、第一ビルサービス(昭和31年設立、代表・杉川聰)、不二ビルサービス(昭和31年設立、代表・森元国行)、三栄産業(昭和33年設立、代表・米山寅男)、合同産業(昭和34年設立、代表・網野公泰)、広島管財(昭和36年設立、代表・川妻卓二)、広島リバイン(昭和39年設立、代表・佐々木清美)、大中建装(昭和40年設立、代表・大中繁之)。(『広島商工名鑑』より)

ビルの清掃会社が出来るまでは、各企業とも社内の清掃は職員が交代で行っているのが普通であり、企業における一例を広島銀行本店の場合でみると次のような状況であった。総務部内に男女の庶務職員を数名採用して、建物内の清掃



ビルメン業を立ち上げた頃の川妻卓二

広島、ビルメン・テナント協会を設立
昭和30年代に入つてからのビル
清掃会社は、総ての地方都市にお
いて設立が広がつていったが、そ
んな中で広島の特徴はいち早く業
者間の横の連携をはかるための協
会が設立されたことであつた。昭和
34（1959）年1月、深江の提案

広島ビルメンテナンス協会を設立

や補修に当たらせていた。事務室内の机上や床など日常一般の清掃は、女子事務員が交代で順番を決めて早出出勤して担当するという状態であり、建物内の警備については男性職員が数名で当宿直をして、夜間と早朝に建物内を巡回警備をしていたという状態であった。

昭和40年に新本店の完成に合わせて、清掃業務はビルメンテナンス会社に、建物の警備については警備専門の会社に委託することになつて現在に至っているが、広島市内における清掃や警備業務委託の先駆けであり、以降、各企業での採用が広がつていったのである。

彼らの問題をある程度組合が中心に入つて解決の方向に誘導するなどの支援を行うこととなつた。

広島美装工業組合の設立にあたつ

で協会の設立が企図され、6社あまりの参加を得て「広島美装工業組合」の名称で組合が設立された。これが現在の「広島ビルメンテナンス協会」となっているものである。

この組合が出来たことで各企業とも随分と助けられた面があった。清掃事業という未知な分野の新規事業なので、職員の教育指導、清掃用具の調達、用具の効率的な使用方法という実務面もさることながら、受託企業と清掃会社との価格交渉手法、清掃範囲の決め方などの経営面についての取り決めも、初めてのことでもありいずれの業者もその折衝には頭を悩ませることとなっていた。これらの問題を、ある程度組合が中に

江戸は既に太陽が昇る頃で、一太陽
装飾工業株式会社」（のちに「株式
会社大装」と変更、現「アスワン」）
の社長として活躍しておられたの
で、同社の本社を訪ねて、3時間
半にも及ぶ長時間、広島ビルメン
協会設立時の様子などを中心にお
話を聞きしたのだが、話の概要
は次のようなことであつた。

務としている株式会社リンレイの
広島での販売代理店として、清掃
会社へのリンレイ製品の納入を主
業務として設立されたのであつた。
当初の資本金100万円、本社を
大手町5丁目に置き、代表者は川
妻卓二であり、卓二の清掃事業へ
の繋がりの第一歩と言えよう。
縁あって筆者（田辺）は平成元
(1989)年3月から『広島ビル
メンテナンス協会30年誌』の編集
に携わることになり、深江実氏と
面談する機会を得た。日記を繰つ
てみると「平成元年6月14日10時
15分訪問、昼食を挟んで14時退出
する」と書いてある。この時は深
江氏は既に大阪に帰られて「大阪

川妻さんがリンレイの代理店をしておられたので、清掃用品の調達には便利であった。川妻さん自身も清掃業を始めたい希望をもつておられたようだが、不自由な身で自信がもてなかつたことで清掃用品の代理店を始めたようだ。組合を結成する上でも川妻さんの後押しと、リンレイのノウハウを導入することが出来たので、参加会社の理解も比較的やすく得られたのだと思う。しかし、中には組合不要論の会社もあつたので最初の参加会社は数社に過ぎなかつた。その後、組合の存在価値が理解されて、40年代に入つてから加入会社も増えていった。

昭和36（1961）年4月にリンレイの広島出張所が開業したことで、リンレイ代理店としての広島物産の役目も一区切ついたので、川妻さんは思い切つて清掃業への挑戦を決意され、同年8月に「広島管財株式会社」

（現・ひろしま管財株）を設立されたのだ。当然組合には加入されたがそれ以降組合への加入企業が増加していった。さらに各地域で組合設立の機運が高まり、広島の組合への照会や問合せが増えていった。その後、組合の連合組織が結成されたが、広島の組合が主導の立場を占めた。

組合のあり方についてはそれぞれの思いがあつたが、新規に受託先を勧誘する場合に、無理な値下げをして受注しても自社の首を絞めることになるので、適正な価格での獲得が大切であり、そのためには業者間の話し合いでの価格の設定も必要であつた。昭和60年代に入り談合とかで随分と話題になつたのだが、清掃業者が出来て以降当分の間は業者間の秩序を保つためにも必要な制度であつたと思う。

隻脚という不自由な身体にも関わらず川妻卓二は、体を動かすことが

本業である清掃業という仕事に立ち向うこととしたのは、2年余にわたる病床生活の中で見えてきた清掃業の大切さやその必要性を実感したからこそ、不自由な体にも関わらずビルメンテナンス業を立ち上げる決意を固めたのであつた。

不自由な身体となつた経緯

川妻卓二は、明治33（1900）年2月18日広島市南千田町で生まれた。川妻という苗字は珍しく広島県内にはあまり見かけず、その先祖は近江長浜（現・滋賀県）の出身と言われているが定かではない。そのような家系の中で、卓二是広島高等師範学校付属中学から早稲田大学に進み、卒業後の大正13（1924）年に鈴木商店に就職した。同店は第一次世界大戦で莫大な収益を上げて、50余もの企業を擁して三井・住友・三菱に匹敵するほどの総合商社に成長して

ことから身近に感じており帝國人絹を希望したもので、東京の勤務で帝人での仕事は順調であった。ところが昭和11（1936）年初頭頃から卓二は、原因不明の發熱や頭痛に悩まされるようになり、近所の医院で診察を受けていたが、発熱の状態は止まらず同年7月に東京駿河台の三楽病院に入院した。入院後も10日あまりは病名が定まらなかつたが、結局、敗血症と診断された。半年くらい前に腰部に腫物が出来て、そこから病菌が入ったためとの見立てであつた。当時、敗血症は助からない病気と言われていたが、連日の激痛と發熱に悩まされていた卓二は、いかような

しかし、昭和2（1927）年

の金融恐慌で鈴木商店が破綻したことから、関連企業の一つであつた帝國人造絹糸（現・帝人）に入社した。帝人は従来の生糸に代わっての人造絹糸の生産が好調であり、独立採算での経営となつていたので鈴木商店倒産の影響は少なかつたし、自宅の近くに広島工場があることから身近に感じており帝國人絹を希望したもので、東京の勤務で帝人での仕事は順調であった。ところが昭和11（1936）年初頭頃から卓二は、原因不明の發熱や頭痛に悩まされるようになり、近所の医院で診察を受けていたが、発熱の状態は止まらず同年7月に東京駿河台の三楽病院に入院した。入院後も10日あまりは病名が定まらなかつたが、結局、敗血症と診断された。半年くらい前に腰部に腫物が出来て、そこから病菌が入ったためとの見立てであつた。当時、敗血症は助からない病気と言われていたが、連日の激痛と發熱に悩まされていた卓二は、いかような

処置をとり、よしんばそれが不成功に終わっても何ら厭うことはないから、との決意を告げて痛みの根源の切除を要請した。

年が改まつた昭和12年1月に数回のレントゲン診察の結果、右足の脛骨手術の必要ありとの診断となり、これに要するためにはドウ糖の注射と輸血を受けて、3月中旬に1回目の脛骨手術を受けた。しかし、手術の経過は芳しくなく12年7月中旬に2回目の手術を受けた。この時点では既に3回目では思い切つて右脚切断の覚悟を固めていた。

昭和12（1937）年9月7日、約3時間余にわたる手術を行い、1年半余に及ぶ発熱と激痛から解放されたのであつた。都合41回に及ぶ輸血を受けたが三楽病院始まって以来の最多輸血という記録保持者となつた。「隻脚切断直後の気持ちは、不思議にもサバサバとした気分であつた。主治医から『どうですか、却つてサバサバしたでしよう』と言われましたが、自分でも『本当にサバサバしました』と何のわだかまりもなく答えることが出来た」と、『駿河台の頃』（昭和十六年四月発行）と題する自著に書いている。

手術後の療養を含めた後に、三楽病院を退院したのは昭和13（1938）年2月24日で、都合517日に及ぶ入院生活であつた。隻脚に義足をはめて松葉杖での生活が始まつたのである。この間に卓二は、病院内の隅々にまで行き渡つてゐる綺麗な清掃ぶりに、驚かされ不思議な思いにさせられたのであつた。

健康も回復した昭和13年6月27日、会社の配慮で郷里の帝国人絹島工場に異動させて頂き、東京を離れることになつた。17歳で東京に出てきて学生生活を経て、鈴木商店と帝國人造絹糸の2社での会社勤務、この間には結婚、家族の増加をみると付き切りとなり、家庭の方は70歳近くになる母に、娘と長男・二男の子ども3人の世話をしてもらうこととなつた。

これについては前出の『駿河台の

頃』では、「私の1年有余の入院中、三人の幼い者達を安心して託し得たのも、年の割に健康な、まめまめしい母ありしがためである。母はいたつて健康である。そして掃除と洗濯が十八番（おはこ）である。たわむれに奉つた仇名が『衛生課長』。と書かれている。この時に卓二は掃除の大切さを痛感し、清掃は周辺を綺麗にし、生活を明るく楽しくしてくれるものだと実感し、専属の清掃事業を思いついたのではないかと感じられる。

健康も回復した昭和13年6月27日、会社の配慮で郷里の帝国人絹島工場に異動させて頂き、東京を離れることになつた。17歳で東京に出てきて学生生活を経て、鈴木商店と帝國人造絹糸の2社での会社勤務、この間には結婚、家族の増加をみると付き切りとなり、家庭の方は70歳近くになる母に、娘と長男・二男の子ども3人の世話をしてもらうこととなつた。

これを全うしたい、との割切つた心境で新しい職場に赴任し、帝人広島工場での仕事に没頭した。

南千田町の自宅から帝人の事務所までは義足で松葉杖でも20分もあれば通勤できたので、適度のリハビリのつもりで往復していた。その頃には帝人の取締役に選任されている。それから7年後の昭和20（1945）年8月6日、突然の閃光と轟音による原爆に逢い、広島女学院で先生をしていた娘は、多くの生徒とともに尊い犠牲となるという不幸な目に遭遇したのである。

広島管財の設立で清掃業に進出 昭和29（1954）年に帝人を退職し、かねてから願いであつた清掃に関連する事業を起こすこととし、同年6月に、清掃用品や清掃機材の製造販売をしているリンレイの代理店として「広島物産株式会社」を創業したのである。翌年、深江実が広島で初めての清掃専門会社である建物美装株を設立されたことで、



二代の社長に仕えてきた井上惠弘氏

広島物産は順調なスタートを切ることが出来て、以降、深江とは刎頸の仲としての付き合いとなつた。昭和33（1958）年1月に深江の提唱で、現在の「広島ビルメンテナンス協会」が設立されたが、その結成に卓二は積極的に協力している。そして昭和36年8月に念願の清掃業「広島管財株式会社」を設立したのである。卓二61歳であった。

隻脚の身で、清掃の現場に向かっている卓二の姿は、ある意味では業界である。

1、ファイト無きものは、波に押しちである。

2、誠実こそわがモットーであり、たゞ視野を広くせよ。ものごとはすべし、信用は一日ではできない。長きに亘り、和が無ければチームワークの効果6、ひとの恩を忘れるな。謙虚な気持7、何ごとも遅れてゆくな。機先を制8、初心を忘れるな。常にありし日を9、苦境にひるむな。生死巔頭に立つ10、人の心をとらえよ。人心の機微は

者間に大きな刺激を与えたのだ。年代には清掃業は一般には認知されていなくて、「きたない、きもちわるい、きげん」と言ういわゆる3Kの業界であり、人手はいくらでも欲しかったのだが、従業員を募集してもなかなか応募がなく従業員が集ら

えたのである。卓二は社員の意識向上と職場への帰属意識を高めるために別記のような「社訓」を定めて朝礼の席で全員に唱和させていた。60年前に決められた「社訓」であるが、現在でも通用する内容と言えよう。

卓二は88年の生涯を閉じた。隻脚といふ不自由な生活を余儀なくされながら念願であった清掃業を立ち上げ、未知の業界を広く世に認知させたのであるから、幸せな人生であつたと思つても良いのではなかろうか。

して昭和36年8月に念願の清掃業「広島管財株式会社」を設立したのである。卓二61歳であつた。

もなかなか応募がなく従業員が集らない、という状況であつた。

このような環境にある中で、かつては天下の帝国人絹の役員をしていた方が、清掃業を始められたということは業界に大きなインパクトを与

えたのである。卓一は社員の意識向上と職場への帰属意識を高めるために別記のような「社訓」を定めて朝礼の席で全員に唱和させていた。60年前に決められた「社訓」であるが現在でも通用する内容と言えよう。

卓二は88年の生涯を閉じた。隻脚といふ不自由な生活を余儀なくされながら念願であった清掃業を立ち上げ、未知の業界を広く世に認知させたのであるから、幸せな人生であつたと思つても良いのではなかろうか。

社訓

- 1、ファイト無きものは、波に押し流されるであろう。闘志こそわがいのちである。
 - 2、誠実こそわがモットーであり、たからである。
 - 3、視野を広くせよ。ものごとはすべからく総合的な判断の上に決せよ。
 - 4、信用は一日ではできない。長きに亘る一つ一つの積み重ね以外にはない。
 - 5、和が無ければチームワークの効果は半減する。
 - 6、ひとの恩を忘れるな。謙虚な気持ちで感謝せよ。
 - 7、何ごとも遅れてゆくな。機先を制せよ。
 - 8、初心を忘れるな。常にありし日をふり返つて見よ。
 - 9、苦境にひるむな。生死巔頭に立つて、初めて忽然と新しい道が展開する。
 - 10、人の心をとらえよ。人心の機微は理論のみではつかまらない。

の支えとなつて尽力したのである。卓二は11年間務めて子息の二郎氏に社長の席を譲つた。二郎氏は社長もさることながら、むしろビルメン協会の会長として幾多の実績を残しているが、彼が協会長としての仕事が出来たのも、会社のことは全てにわたつて井上氏が取り仕切つていたからと言えるであろう。

のはパートの清掃女性であつた。その女性はカマボコ板に「落書きをしないで下さい。ここは私の神聖な職場です」と書いて張るとピタッと落書きはなくなつた。ソニー井深大社長の述懐だそうだが、卓一も折にふれては「トイレは神聖な場所である」との精神で励みたいとの想いでいた。

このような卓一の清掃に対する精神が、今に持ち続けられていることで、ひろしま管財は今年60周年を迎えたのであろうと思われる。